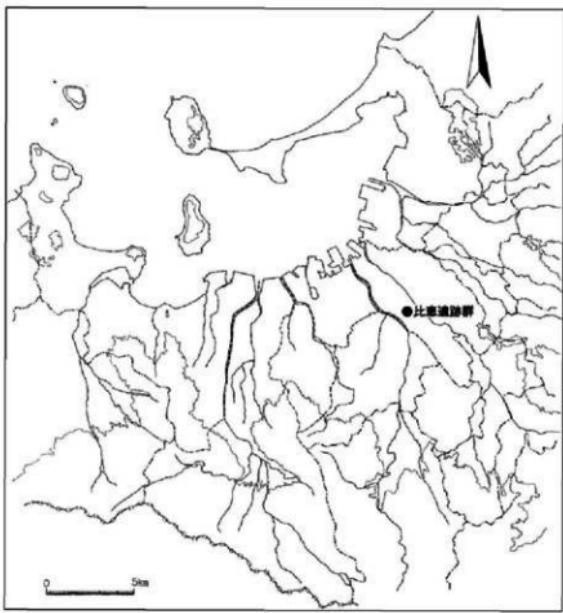


比 恵 45

—比恵遺跡群第98次調査報告—

2007

福岡市教育委員会



遺跡番号 HIE-98
調査番号 0501

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する比恵遺跡群第98次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで有限会社古里服装をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成17年度に博多区博多駅南3丁目432番において実施した比恵遺跡群第98次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸が行った。
3. 遺物の実測は長家、吉留秀敏、小嶋篤、西江幸子が行った。
4. 製図は長家、吉留が行なった。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18'西偏する。また、座標は特に記さない限り日本測地系を使用している。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は竪穴住居跡（S C）、貯藏穴（S U）土坑（S K）、ピット（S P）である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の執筆はII-3-5) 刺片石器類については吉留が行い、他の執筆及び編集は長家が行った。

遺跡調査番号	0 5 0 1	遺跡略号	H I E - 9 8	
所在 地	博多区博多駅南3丁目432		分布地図番号	37-0127
開発面積	289.42m ²	調査対象面積	170.73m ²	調査面積
調査期間	平成17年4月1日～平成17年4月22日		事前審査番号	16-2-737

本文目次

I はじめに.....	1
1 調査にいたる経過.....	1
2 調査体制.....	1
II 調査の記録.....	5
1 遺跡の立地とこれまでの調査.....	5
2 調査の経過.....	5
3 造構と遺物.....	5
1) 坂穴住居跡.....	5
2) 収蔵穴.....	10
3) 土坑.....	11
4) 包含層出土の遺物.....	13
5) 刃片石器類.....	13
6) 小結.....	16

挿図目次

第1図 調査区位置図1 (1/50000)	2
第2図 調査区位置図2 (1/2000)	3
第3図 調査区位置図3 (1/500)	4
第4図 調査区全体図及び東壁土層 (1/100)	6
第5図 SC05及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	9
第6図 SU04及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	11
第7図 SK03及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)	12
第8図 包含層出土遺物実測図1 (1/2、1/3)	14
第9図 包含層出土遺物実測図2 (1/2、1/3)	15
第10図 旧石器時代の遺物 (1/1)	16

写真目次

写真1 調査区南側全景（北から）	7
写真2 調査区北側全景（西から）	7
写真3 調査区南側東壁土層	8
写真4 SC05（北から）	8
写真5 SU04（南東から）	10
写真6 出土石器	16

I は じ め に

1 調査にいたる経過

平成16年11月2日付けで、大阪市西淀区竹島5-6-34 範多機械株式会社 代表取締役大月正雄氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区博多駅南3丁目432番における、埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号16-2-737）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群（分布地図番号37-0127・遺跡略号HIE）に含まれている。このため教育委員会では所有者の了解の上、平成18年11月11日に申請地の試掘調査を行い、現地表面から85~100cm掘削したところで、包含層及び鳥栖ローム層の遺構面を確認し、溝状の遺構を検出した。

この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。この後、申請地の売却が行われ、売却先である有限会社吉里服装との協議の結果、建設予定である共同住宅の構造上、遺構の破壊が避けられないため、申請地289.42m²のうち建物部分の170.73m²を対象として、平成17年度に発掘調査、平成18年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお「埋蔵文化財発掘調査経費の国庫補助金適用要項」により、発掘調査・資料整理について国庫補助金を併用している。

調査期間は平成17年4月1日～平成17年4月22日である（調査番号0501）。調査面積は157m²、遺物はコンテナ6箱分出土している。なお対象地外の118.69m²については現状保存とする。

発掘調査・資料整理にあたっては有限会社吉里服装をはじめ関係の皆様から、御理解を頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2 調査体制

事業主体 有限会社 吉里服装

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課（現：埋蔵文化財第1課）

調査総括 平成17年度（発掘調査）

埋蔵文課財課長 山口譲治 調査第2係長 池崎謙二

平成18年度（整理・報告書作成）

埋蔵文化財第1課長 山口譲治 調査係長 山崎龍雄

調査庶務 平成17年度（発掘調査）

文化財整備課 鈴木由喜

平成18年度（整理・報告書作成）

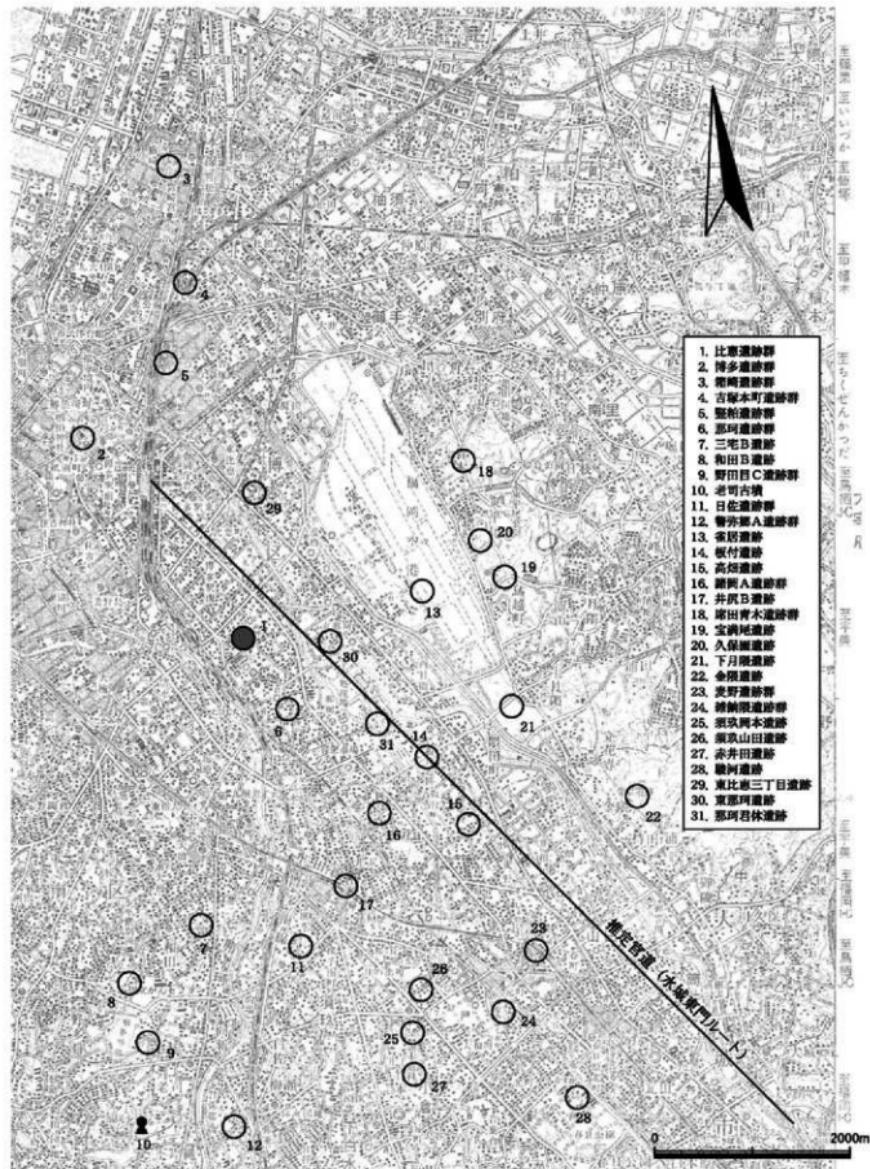
文化財管理課 鈴木由喜

調査担当 埋蔵文化財課 調査第2係 長家伸

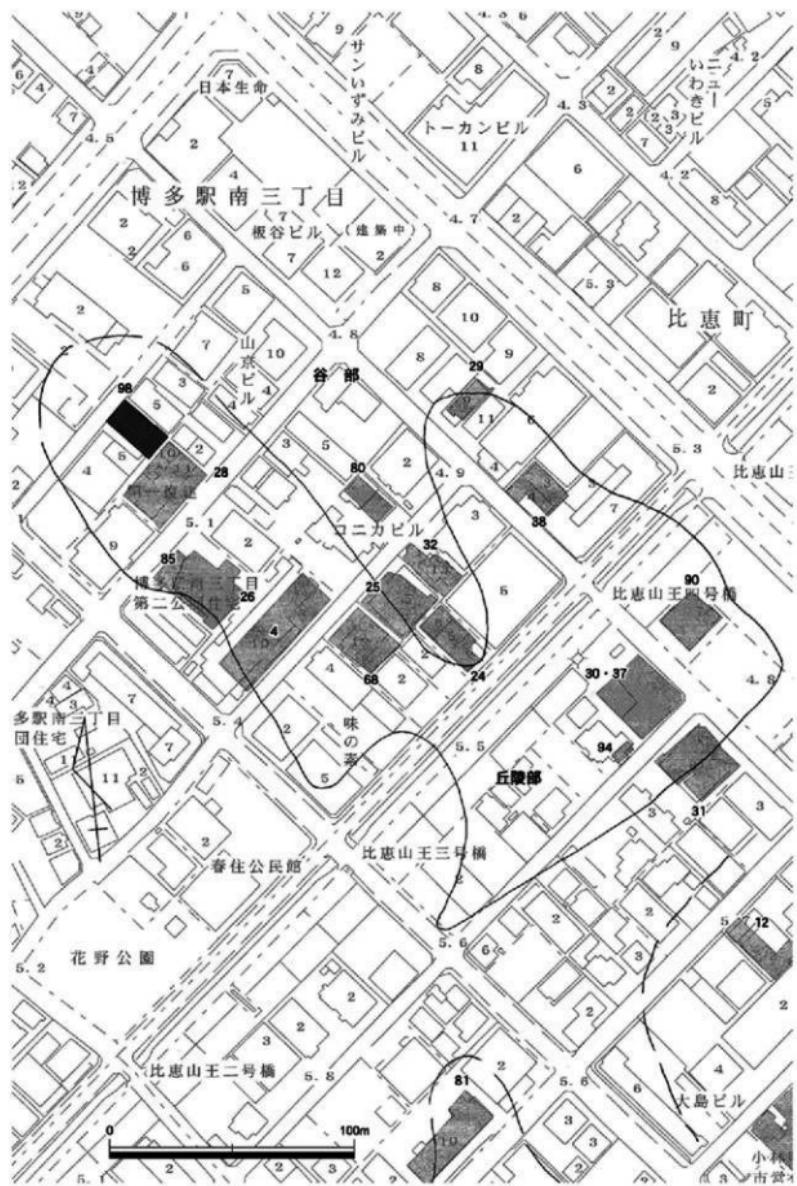
調査作業 澄川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ

藤野幾志 西川シズ子 宮崎幸子 斎野孝子 中島道夫

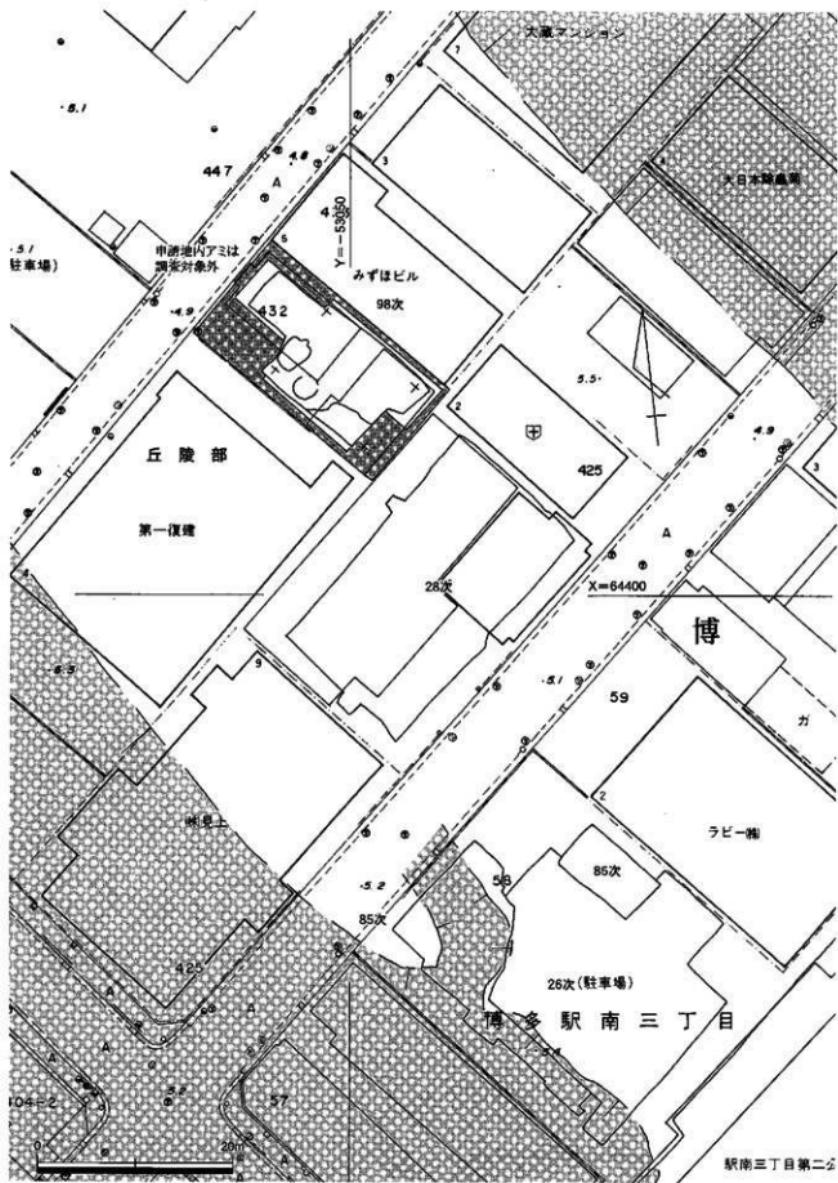
整理作業 石谷香代子 大田次子 星野明子 桶口久子



第1図 調査区位置図1 (1/50000)



第2回 調査区位置図2 (1/2000)



第3図 調査区位置図3 (1/500)

II 調査の記録

1 遺跡の立地とこれまでの調査

比恵遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩礫層で、この上面に阿蘇噴火火砕流・火山灰である八女粘土層・鳥栖ローム層・新期ローム層が堆積している。南側に隣接する那珂遺跡群とは一連の丘陵上の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲はあわせて南北2.4km、東西1kmに及ぶと考えられる。

今回の調査対象地は28次調査の北側に位置し、比恵遺跡群の調査では最も北端部に位置する調査区である。ここでは周辺の調査概要について、簡単にふれておきたい。

丘陵の北端部分はこれまでの発掘調査・試掘調査等の成果により、31次調査で確認された河川により、本体と切り離され、北側先端部は二股に分かれた状態となっているものと考えられる（第2図参照）。北側に延びる2列の丘陵部分の西側においては、28次調査を先端とし、4・24・25・26・68・85次の調査が行われている。また東側の張り出し部分では29・38次調査、丘陵部分に挟まれた谷部の調査としては32・80次調査が行われている。この島状となった丘陵先端部の調査ではこれまでに弥生時代前期中頃～中期前半を主体とした竪穴住居跡・貯蔵穴・水田等の生活遺構が確認され、沖積地に落ち込む縁辺に形成された包含層からは同時期の多くの土器と共に木器・石器類が出土している。

今回の調査地点の南東側に隣接する28次調査地点では、南側で鳥栖ローム層を確認し、北端部ではローム層の上面に流水を示す砂層の堆積が認められ、丘陵が北側に傾斜していることが確認されている。建物解体により遺構の多くが失われていたが、弥生時代前期と考えられる竪穴住居跡・貯蔵穴・土坑・ピット他に弥生時代中期中頃の壺棺墓を1基確認している。また遺構面上層の砂層中からは弥生時代前期～中期中頃の遺物が出土し、一部弥生時代後期・古墳時代前期の遺物も含まれていた。今回の98次調査地点においても、弥生時代前期～中期前半の生活遺構・遺物を確認することができ、該期の遺構の広がりを確認したものである。

2 調査の経過

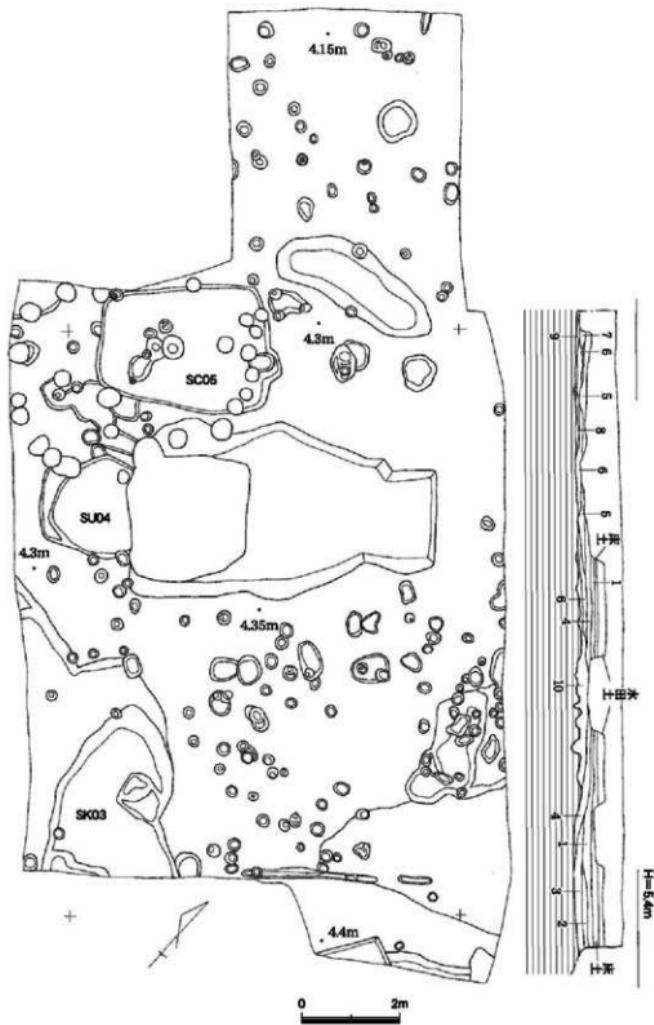
調査対象地は現状で既存建物解体後の未舗装の平地となり、標高は5.1m前後を測る。調査は重機による表土の除去から行った。この際調査廃土を場内処理する必要から当初南半部分の調査を行い、終了後土砂反転して北半部分の調査を行うこととした。申請地の層序は現地表-40～60cmが旧水田土、-60～70cmは床土で、以下1層：粗砂を含む灰色土、2層：粗砂を多く含む灰色砂質土、3層：灰白色砂質土、4層：灰色砂質土、5層：淡い暗褐色土、6層：粗砂、7層：暗褐色シルト、8層：粗砂混じりの暗灰色土、9層：粗砂、10層：暗褐色土である。遺構面は鳥栖ローム層上面で凹凸を有しながら、標高は4.2m前後で北側に向かってゆるやかに傾斜している。遺構埋土は暗褐色土を主体とし、竪穴住居跡1棟、貯蔵穴1基のほかは人為的な遺構としては判然としないものが多く、土坑として掘り下げたものについても地山上の自然のくぼみに堆積したような形状を呈している。

3 遺構と遺物

1) 竪穴住居跡 (S C)

S C 05 (第5図、写真4)

調査区中央部で検出した。長軸3.5m、短軸東側2.5m・西側1.8mを測り、検出面から床面までの深さは20cmである。埋土はロームブロックを含む暗褐色土である。床面はほぼ平坦で中央部に炉跡と



第4図 調査区全体図及び東壁土層（1／100）

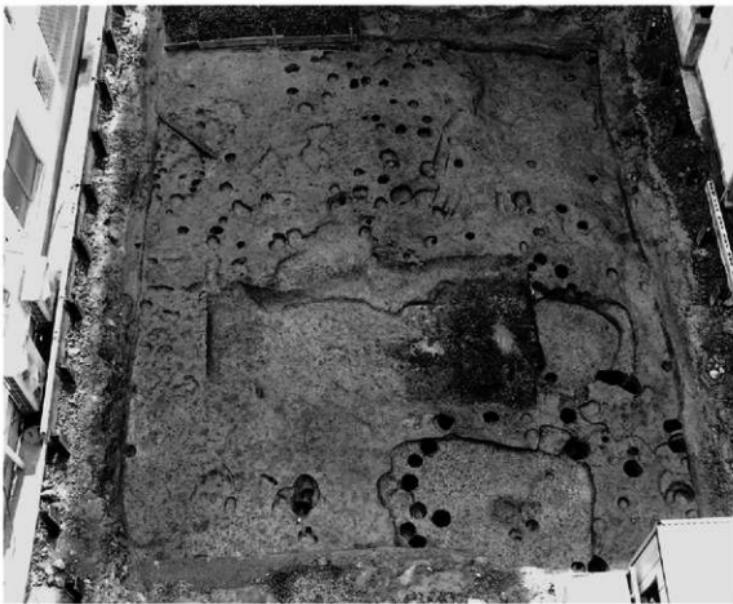


写真1 調査区南側全景（北から）

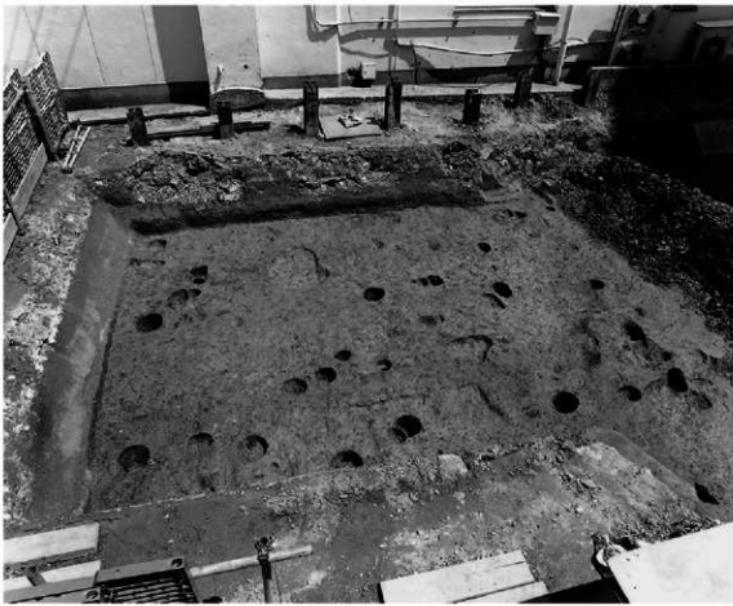


写真2 調査区北側全景（西から）



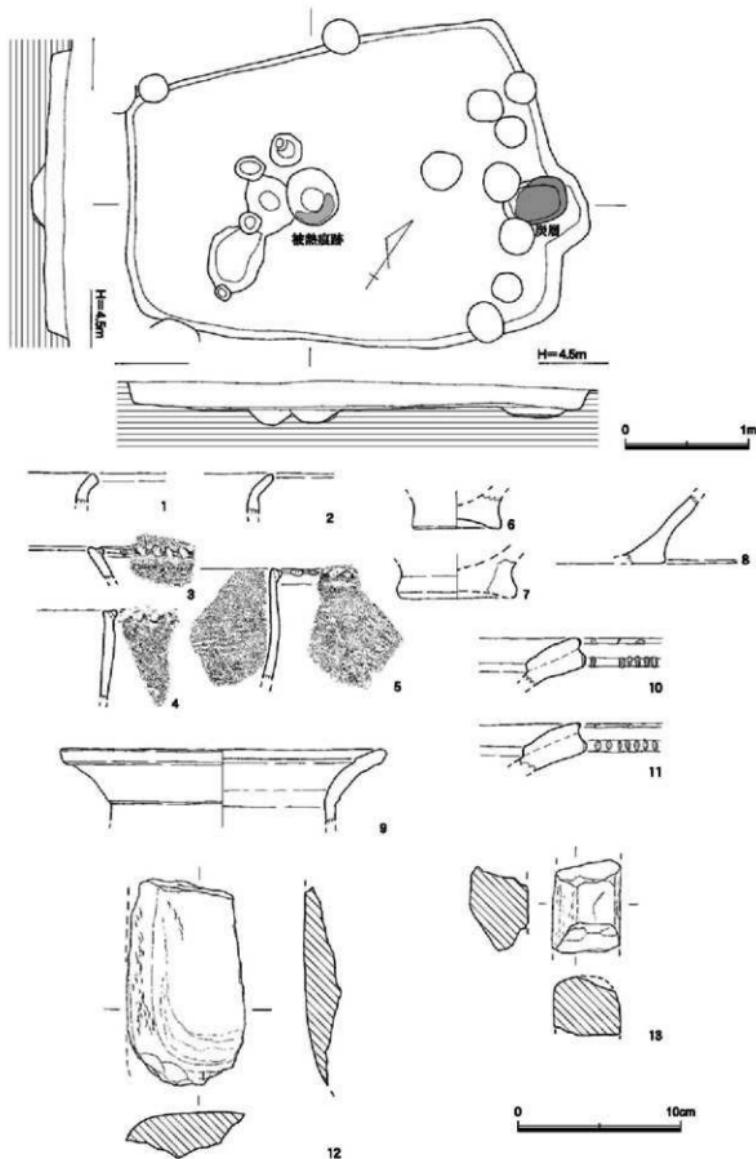
写真3 調査区南側東壁土層



写真4 SC05 (北から)

考えられる掘り込みが認められる。径40cm、深さ10cm程度で、断面は浅皿状を呈する。南東側の壁面に赤褐色の被熱痕跡が認められるが、埋土には炭化物は含まれていない。位置・形状等から住居跡に伴う炉跡と判断した。また東壁中央部分には部分的な張り出し部分があり、この床面には長軸50cm、短軸35cmの長円形を呈し、深さ5cm程度の深い掘り込みが残されている。埋土はロームブロックを含む炭化物層で、床面には混合土のない炭層が広がっている。ここでは被熱痕跡は認められない。またこの他に住居に伴うピット状の掘り込みもあるが、主柱穴と考えられるものは検出していない。出土遺物は弥生土器小破片、黒曜石剝片他の石器破片などがナイロン袋1袋程度出土している。弥生時代前期中頃～後半に位置付けられる。

出土遺物（第5図） 1～5は壺の口縁部である。1・2は如意形口縁の小破片である。内外面ナデ調整を行う。3～5は突帯文系の口縁部である。いずれも口縁部外面に突帯を貼り付け、刻みを施



第5図 SC 05及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

している。内外面の調整は横方向の条痕による。6～8は底部である。6・7は残存状態は不良であるが、上げ底を呈するものと考えられる。8は平底である。9～11は壺の口縁部である。9は口縁部内外面を肥厚させ、両面に段を有する。また端部外面は面取り状を呈している。10・11は口縁部上面に粘土帯を貼り付けている。外面には上下2段の刻み目を有する。12は玄武岩製の石斧破損品である。13は玄武岩製の柱状片刃石斧の破損品である。

2) 貯蔵穴 (S U)

S U04 (第6図、写真5)

調査区中央部、SC05の南側で検出した。以前の建物の基礎による搅乱により、北東部分を失っている。南西側に隅丸長方形の張り出しを有するが、本体は径2.1mの円形を呈するものと考えられる。壁はやや開き気味に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。埋土はほぼ水平に堆積しており、ロームブロックを含む暗褐色土を主体とし、炭化物等は認められない。弥生土器小破片、黒曜石等の剥片がナイロン1袋分出土している。土器はいずれも小破片のみで復元可能なものはないが、前期後半～中期前半に位置付けられる遺物が主体となるが、時期の下るものもわずかに出土している。

出土遺物 (第6図) 14～18は壺の口縁部破片である。14～17は特に摩滅が進んでいるが、如意形口縁部の破片である。17は端部を外方に屈曲させ、端面には刻みを施している。18は口縁部外面に貼り付けを行い、断面を三角形を作り、端部には刻みを行う。19・20は胴部破片である。19は屈曲部外面に突帶を貼り付け、刻みを行う。また20は断面コ字形の突帶を貼り付け、外面には刻みを行う。21～23は平底の底部破片である。23の外面には継刷毛を行う。24は丹塗り土器の小破片である。屈曲部に断面コ字の突帶を貼り付けている。25は高環脚部である。脚端部はハ字に広がり、端部は丸く納める。また屈曲部外面には断面三角形の突帶を貼り付ける。

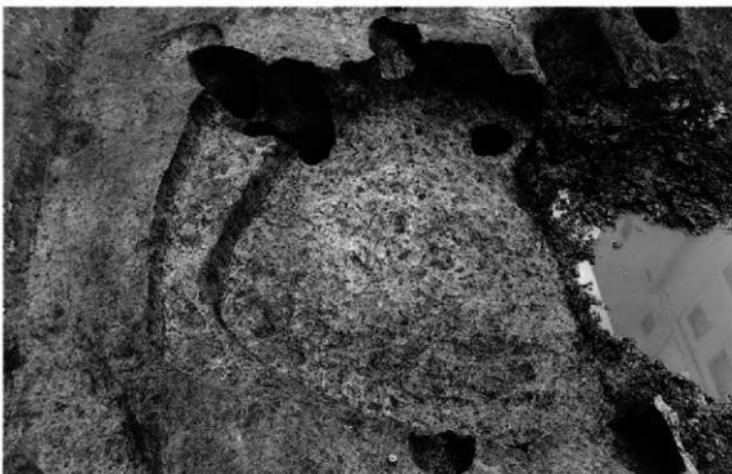
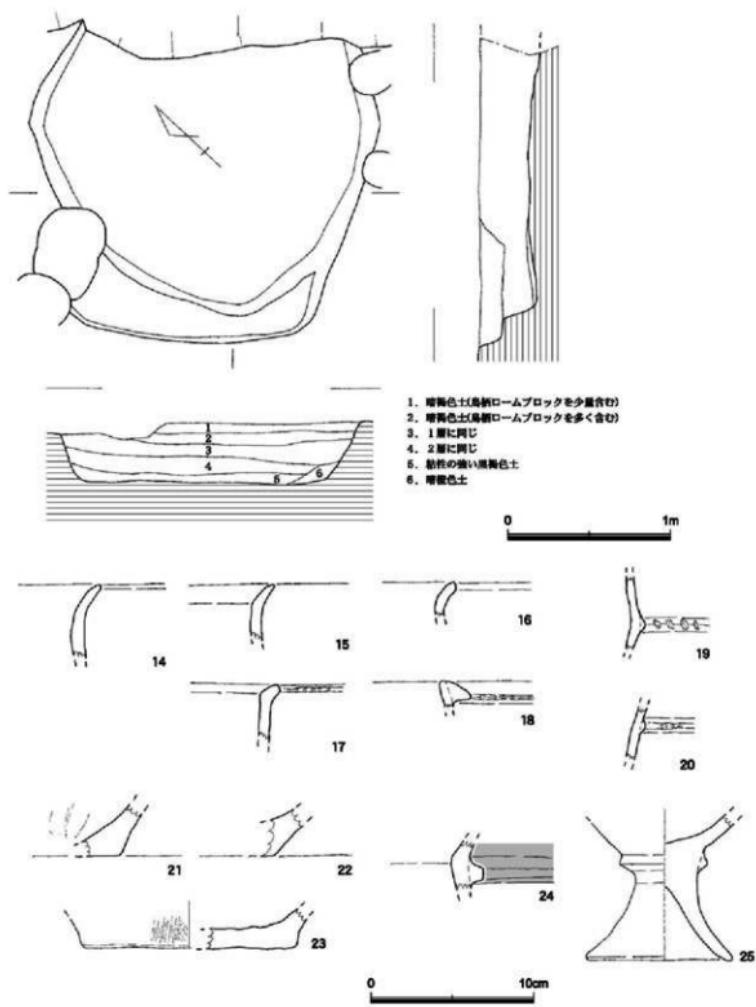


写真5 S U04 (南東から)

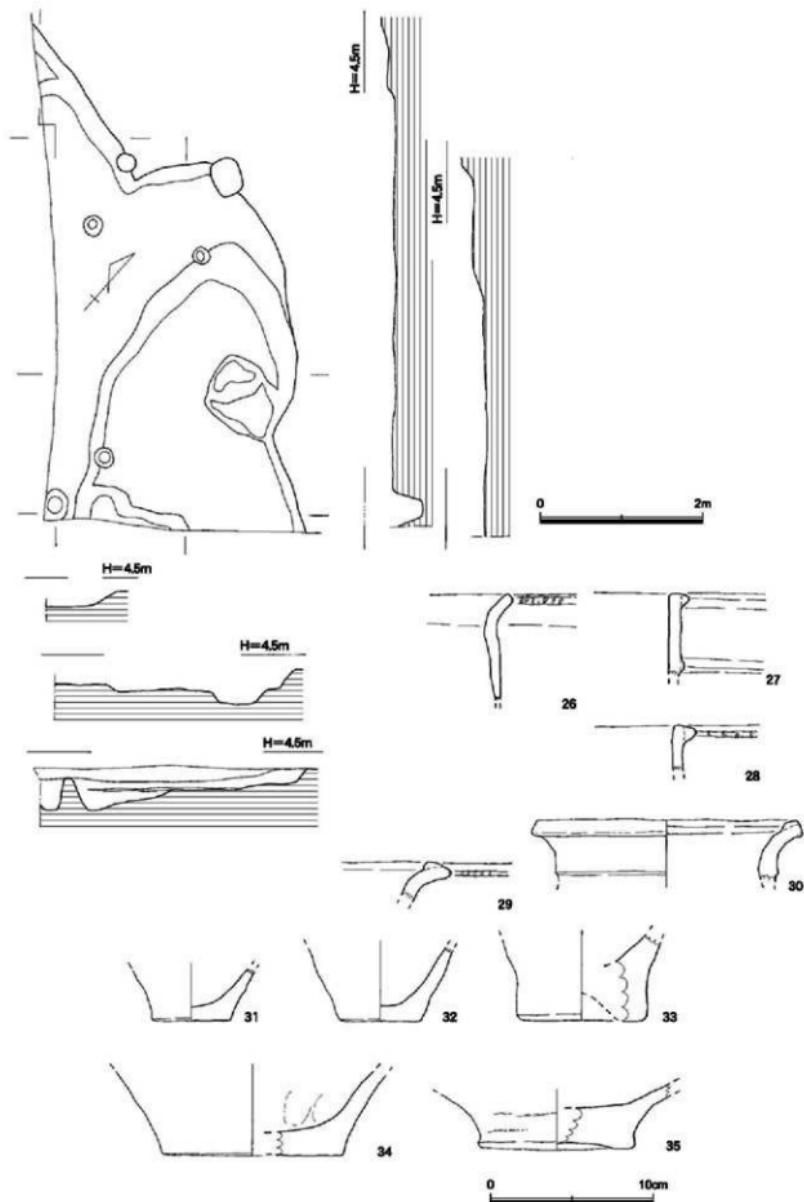


第6図 S U04及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

3) 土坑 (SK)

S K03 (第7図)

調査区南隅で検出した。平面形状は不整形で、断面には階段状の平坦面が残る。底面は全体には平坦であるが、凹凸が多く認められる。埋土は粗砂にシルトが混合し、深くなっている部分には青灰色粘質土が堆積している。流水等による堆積と考えられる。弥生時代前期後半～中期前半に位置付けら



第7図 SK 03及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)

れる土器破片が出土している。

出土遺物（第7図） 26~28は壺の口縁部である。26は如意形の口縁部で、端面には刻みを有する。27は摩滅が進んでいるが、口縁部及び胴部外面に粘土帯を貼り付けたものである。突帯に施される刻みは摩滅により失われている。28は口縁部を断面三角形に作り、端部外面に刻みを施したものである。29・30はいずれも端部を肥厚させる壺の口縁部である。29は断面三角形を作り、端面に刻みを施す。30は上下に肥厚させている。また頸部には段を有する。31~35は底部破片である。31・32は面径の小さな平底である。33は厚手で上げ底に復元できる。34は平底で、35は中央部分が僅かに上げ底となる。

4) 包含層出土の遺物（第8・9図）

遺構面上の上層には旧水田土・床土との間に遺物を含む包含層を確認している（第4図参照）。10層は遺構面上の凹凸・不整な落ち込みに堆積した埋土である。また1~9層については形成時期は不明であるが、中途に堆積している粗砂層（6・9層）は河川性の堆積物であると考えられる。遺物はコンテナ3箱程度出土しており、主に弥生時代前期後半～中期前半に位置付けられる土器破片、石器、剝片類が主体を占めている。

36~39は3層～9層の出土遺物である。36は断面逆L字状を呈する壺の口縁部である。外面には縦刷毛、内面はナデ調整を行う。37は口縁部上面端部に粘土帯の貼り付けを行い肥厚させる壺口縁部である。38・39は上げ底の底部である。38には外面に縦刷毛が残る。

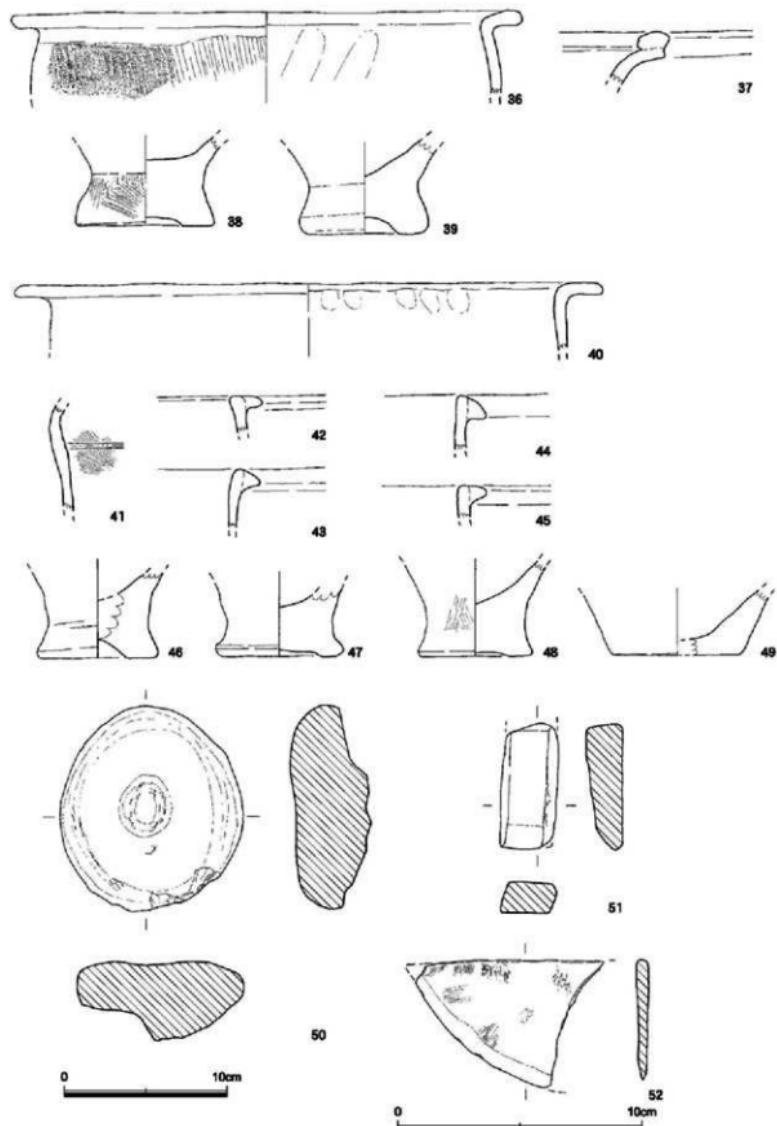
40~52は6層～9層として取り上げた遺物である。40は断面逆L字状を呈する壺口縁部である。41は如意形の口縁部を呈する壺の胴部破片である。外面には斜め方向の刷毛目が行われ、屈曲部の下位には一条の沈線が施される。42~45は断面三角形を呈する壺の口縁部である。46~48は上げ底の底部で、48には外面に縦刷毛が行われている。49は平底の底部である。50は磨石である。中央部分が僅かに崖み、やや赤変した2次の被熱痕跡が認められる。反対面は欠損している。51は片刃石斧である。52は石包丁の欠損品である。

53~73は10層出土遺物である。53~57は如意形口縁部の破片である。53は端面に刻みを残す。54・55は外面に擦痕状の調整痕を残している。56は端面をやや拡張して面取りを行い、胴部に一条の沈線を刻んでいる。57は口縁部外面を僅かに肥厚させている。また胴部には二条の突帯を貼り付け、刻み目を施している。58~61は断面三角形を呈する壺の口縁部である。62~69は底部破片である。外底面は平底と上げ底がある。70~73は石器である。70は片刃石斧である。71は砂岩製で、上面に鑄型に見られるようなやや弧を描いた線状の彫り込みが認められる。72は緑灰色片岩製の未製品で、粗い磨きが行われている。73は玄武岩製の太形石斧欠損品である。

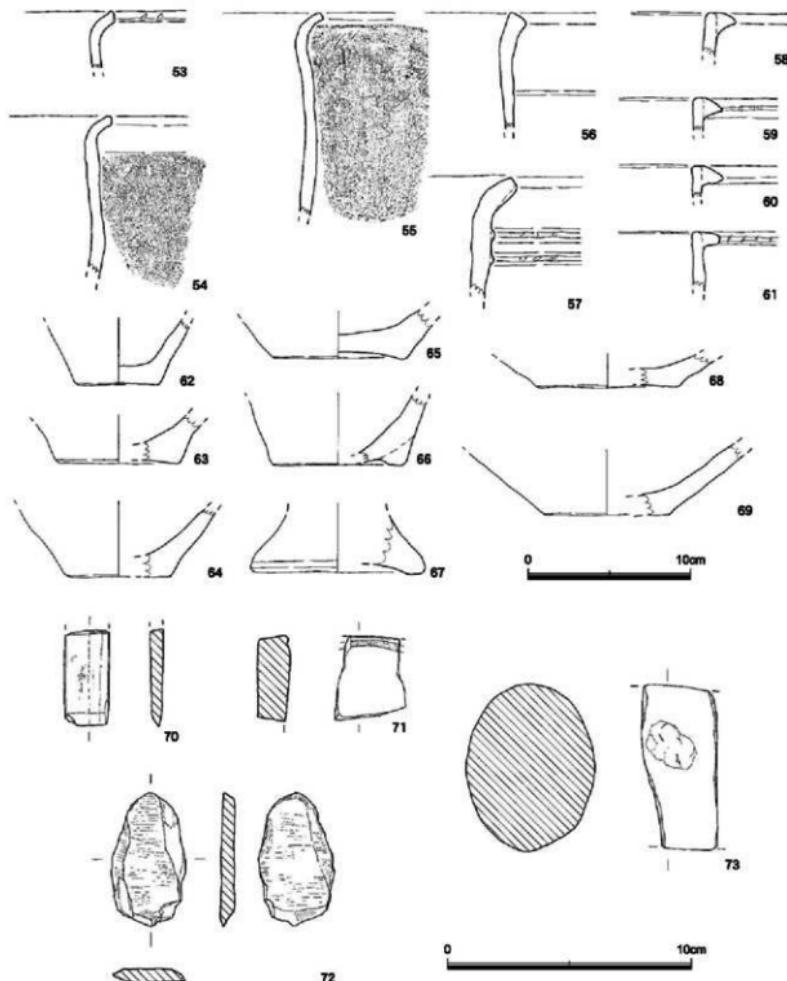
5) 剥片石器類（第10図、写真6）

本調査では48点の剥片石器類が出土した。全て黒曜石製であり、このうち2点は表面の風化が著しく進んでおり、旧石器時代の所産とみられる。その他の46点は表面の風化が少なく、剥離技術や石器組成から本遺跡群で多く認められる弥生時代前期後半から中期前半に位置づけられるものである。弥生時代の石器群は貢数の都合で掲載できないが、二次調整や微細剥離のある剥片が4点、剥片28点、碎片9点、石核5点がある。この内石核にはやや不安定ながら平坦打面の縦長剥片剥離や熱破碎面を有するものがあり、前期後半の特徴を示している。なお石材は全て自然面が平滑で漆黒色良質の黒曜石であり、伊万里市腰岳産と見られた。

旧石器時代の遺物には、ナイフ形石器と剥片がある。74は10層（暗褐色土）出土のナイフ形石器である。先端を欠失するが他の部位はほぼ残されている。弱透明黒色の良質黒曜石を素材としている。

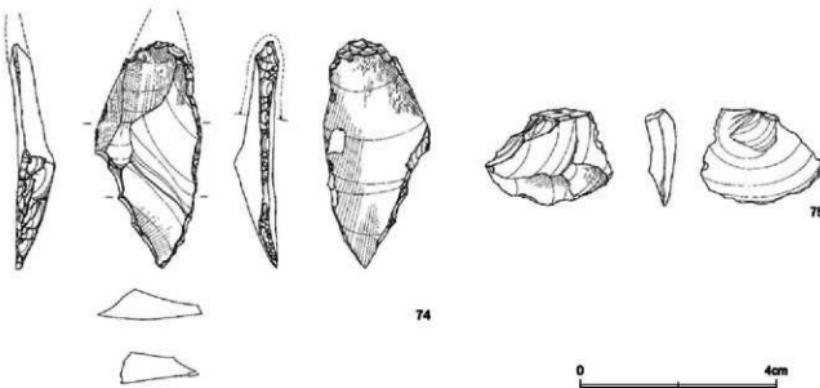


第8図 包含層出土遺物実測図1 (51・52は1/2、その他は1/3)



第9図 包含層出土遺物実測図2 (70-73は1/2、その他は1/3)

表面はやや風化が進み、周囲に調査時以前を含むやや風化の弱いガジリがある。現存長4.6cm、幅2.2cm、厚さ0.8cmを測る。復元長は約6cm前後と推定できる。素材はやや幅広の縦長剥片であり、背面に4面の先行刺離面が残されている。この剥片の打面を先端部とし、左側縁を刃部として二側縁に打面調整を施している。なお剥片刺離は上下からの先行刺離による中央階段状刺離の稜部を取り込んでおり、



第10図 旧石器時代の遺物（1／1）

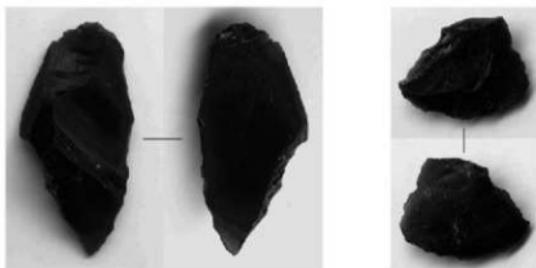


写真6 出土石器

打面両設石核が推定される。先端部は欠損しているが、衝撃剥離ではなく搔器状の小剥離となる。また、先端部、刃縁部を主に微細状剥離や線状痕、摩滅が著しく残されている。これらは使用痕と推定されるが、先端部小剥離を切るものが多く、欠損後に形成されたものと見られた。75はS U005出土の不定形の小型剥片か石核の調整剥片である。弱透明黒色の良質黒曜石を素材としている。風化が進み摩滅が著しい。平坦打面で背面は左方向からの数面の剥離で構成される。2点ともに本来の包含層を遊離したものであり、時期は確実でないが、ナイフ形石器の特徴から後期旧石器時代に比定され、AT降灰前後の時期と推定される。（この項 吉留）

6) 小結

本調査においてもこれまでの周辺の調査と同様に弥生時代前期～中期前半を主体とした遺構（竪穴住居跡1棟・貯蔵穴1基・土坑1基他ピット）が確認され、遺構面上層にはほぼ同時期の遺物を含んだ包含層を確認した。丘陵最先端部は幅約70mを測り、非常に緩やかな勾配で前面の沖積地に落ち込んでいくものと考えられる。周辺には水田等の生産遺構も存在したものと考えられ、今後の調査に期待したい。また旧石器時代に位置付けられる遺物が2点出土しており注目される。

書名ふりがな ひえよんじゅうご
書名 比恵45
副書名 比恵遺跡群第98次調査報告
卷次
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号 第954集
編監者名 長家 伸
編集機関 福岡市教育委員会
発行機関 福岡市教育委員会
発行年月日 20070330
作成法人 I D
郵便番号 810-8621
電話番号 092-711-4667
住所 福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名ふりがな ひえいせきぐん
遺跡名 比恵遺跡群
所在地ふりがな ふくおかはかたくはかたえきみなみ3ちょうめ432番
遺跡所在地 福岡市博多区博多駅南3丁目432番
市町村コード 40132
遺跡番号 37-0127
北緯 $33^{\circ} 34' 58''$
東経 $130^{\circ} 25' 34''$ (世界測地系)
調査期間 20050401~20050422
調査原因 共同住宅建設
種別 集落
主な時代 弥生時代
遺跡概要 弥生時代 堪穴住居跡1、貯蔵穴1、土坑1、ピット、包含層
特記事項

福岡市埋蔵文化財調査報告書第954集

比恵45

—比恵遺跡群第98次調査報告—

2007年（平成19年）3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷有限会社浦永印刷
福岡市東区原田1丁目9番23号
